侵略戦争と「核の脅威」

ロシアのウクライナ侵略、「核で威嚇」に断固抗議する。写真は日経新聞 3 月 1 日。記事を抜粋して紹介する。

プーチン氏、核で威嚇

キューバ危機以来の局面に

国防相「実行の準備整った」

核戦争が危惧された主な出来事

1946–54年 インドシナ戦争

ベトナム独立勢力に苦戦したフランスが米国に核兵器供与を一時要請

50–53年 朝鮮戦争

中国軍の参戦で劣勢に立った国連軍のマッカーサー司令官が核兵器使用を検討後に解任

56年 第2次中東戦争

スエズ運河を国有化したエジプトと英仏イスラエルが戦争。エジプト支援のソ連が核で威嚇

62年 キューバ危機

ソ連による中ユーバへのミサイル配備を発端に米ソが核戦争寸前に

67年 第3次中東戦争

イスラエルが秘密開発していた核兵器の使用を一時検討

ロシアのプーチン大統領は2月27日，ロシアの核戦力の部隊を警戒態勢にしたことを明かした。ウクライナ侵攻が当初予想した形で推移していないことにいら立ちを深め、核兵器使用も辞さない姿勢を示した。国防相は、核抑止力の強化に「実行の準備整った」と強調した。

ロシア軍は2月11日、「ロシアのナチ化」を目的とするウクライナ侵攻を開始。ウクライナ軍の抵抗に苦戦し、ロシア国内からは「特別軍事作戦」の長期化を懸念する声が出ていた。プーチン氏は、核兵器使用を含めた「あらゆる手段」を使うとの強硬姿勢を示した。

ロシアは有事の際に事態のエスカレートを止めることを目的にあえて核兵器使用というエスカレート手段をとるかもしれない」―。米欧の安全保障当局者や軍事専門家の間でこんな懸念が深まり、「エスカレート・トゥ・ディエスカレート」という英語表現を略した「E2DE」という言葉が広がり始めたのは 2010 年代だった。

米軍によって広島と長崎に投下されたのち、被害の甚大さゆえに核兵器の使用は事実上禁じ手とされてきた。その核をあえて突如使ってみせることで、NATO 軍などをパニック状態に追い込み、自らに有利な形で停戦にもっていく。そんな構想をロシアが持っているようだと米国防総省は 18 年版「核態勢見直し」報告書で指摘した。ロシア自体も、こうした考えを 20 年公表の「ロシア連邦の核抑止政策の基礎」という公式文書でにじませた。

プーチン氏が危険な「核の脅し」に動く背景に、同氏の深い焦燥感があるのは明白だ。旧ソ連圏を部分的でも復活させることを宿願とする同氏が一世一代の侵攻作戦に踏み切ったにもかかわらず、米欧の支援を受けたウクライナ軍の奮戦で戦争目的を達成できていないことに加え、ロシアという国の歴史的評価を地に落とし、経済面でも大打撃を受ける「大失敗」が見え始めているのだ。追い詰められたプーチン氏だからこそ、危険極まりない E2DE 戦略を「局面打開の秘策」とみている可能性がある。

核戦争に突き進むみかねない事態はキューバ危機など何度も訪れたがいずれも辛うじて回避できた。根底には、核のもたらす災厄に対する各国政府指導者たちの危惧が共通してあった。今後万一、ロシアの核使用が現実になれば、中・長期的に「核使用の敷居」が一気に下がってしまい、核保有国が安易に小型核を武力紛争で使うようになってしまう懸念さえある。

ウクライナでの戦争はもはや局地的な戦争ではなく、人類全体が深刻に危惧すべき事態になりつつある。

（2022 年 3 月 2 日）